



故 紀 嘉 子 先生

紀 嘉子先生（2015 年 6 月 15 日永眠，80 歳）

▷略 歴◁

1934 年 10 月 6 日	出生
1953 年 3 月	同志社女子高等学校卒業
1957 年 3 月	同志社女子大学学芸学部家政学専攻卒業
1957 年 4 月～1958 年 3 月	同志社女子高等学校家庭科講師
1958 年 4 月～1962 年 3 月	同志社高等学校家庭科講師
1962 年 4 月～1963 年 3 月	同志社女子大学臨時要員
1963 年 4 月～1970 年 3 月	同志社女子大学研究助手
1970 年 4 月～1977 年 3 月	同志社女子大学専任講師
1977 年 4 月～1985 年 3 月	同志社女子大学助教授
1985 年 4 月～2000 年 3 月	同志社女子大学教授
2000 年 4 月～2002 年 3 月	同志社女子大学特別任用教授
2002 年 4 月	同志社女子大学名誉教授
1986 年 4 月～1988 年 3 月	同志社女子大学家政学部家政学科主任

▷主な担当科目◁

家庭経営学，人間生活学基礎研究，生活経営学，生活科学原論，卒業論文

▷所属学会◁

日本家政学会，日本生活学会，日本消費者教育学会

紀 嘉子先生を偲んで

元本学名誉教授 紀 嘉子先生（人間生活学科 家庭経営学）が2015年6月15日に永眠されました。享年80歳でした。

心より哀悼の意を表し、ご生前のご業績並びにご尽力に対し心より感謝申し上げますとともに、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

紀先生は女子大において39年の永きにわたり、教育並びに研究に携わって来られ、2002年3月に退職されました。

先生は、1963年に研究助手としてご着任され、以後2000年にご定年を迎えられるまで、37年間、さらに特任教授として2年間、女子大のために尽くしてこられました。しかも先生は、1957年本学学芸学部家政学専攻のご卒業です。で、生粋の同志社人といっても過言ではないと思います。

戦後の学制改革によって新制大学が成立し、1949年に同志社女子大学が創設されました。紀先生のご成長の歩みは、戦後の本学家政学部の発展の歩みとびたりと重なり合います。

既刊の『同志社女子大学125年』記念誌の205ページをご覧くださいますと、1967年当時の「生活実習ハウスでの授業風景」の写真が掲載されています。この写真で特に人目を引きますのは、一目惚れするような愛くるしいお顔の授業担当者です。言うまでもなく、それは研究助手時代の紀先生ですが、先生は1963年に家庭管理学の4年生の実習担当者として教員生活のスタートを切られました。

私は、1990年の入社ですので、紀先生とは、1990年代以降をご一緒させていただきました。先生のご専門は、生活科学原論と生活経営学ですが、いずれも生活科学の扇の要となるものです。先生は、キリスト教主義精神を基礎に教育と研究の両立を目指し、独創的な愛と幸福の実践的な新しい生活経営学を確立せんと鋭意努力されていました。

さらに、先生は大変教育熱心な方で、心血を注いで学生たちの教育に当たって来られました。300人を超えるゼミ卒業生を世に送り出され、教え子たちはそれぞれ各方面で活躍しています。

生活科学原論研究では、アメリカ家政学史研究の権威のお一人でもありました。生活経営研究では、私も日本家政学会の生活経営学学会、その関西地区研究会などで先生とご一緒させていただきましたが、先生の生活経営研究は伝統的な家庭経営学からの脱皮を目指し、個人と家族、家族と社会の自立と共同の可能性を探る、新しい独創的な生活経営研究でした。それは、広範で緻密なアンケート調査によって裏付けられた実証主義的な研究であり、高く評価されています。

当時の先生のご研究には男女共同参画社会という言葉がしばしば登場していました。

21世紀は少子・高齢社会の時代であるとともに、男女共同参画社会＝ワーク・ライフ・バランス社会形成の必然性を持った時代でもあります。日本の少子・高齢社会は、(1)常態化した異常な長時間労働、(2)大幅な男女間、正規・非正規社員間の賃金格差、(3)育児・介護に対する社会的・地域的支援体制の未確立・不備など多数の深刻な諸問題を抱えています。

男女共同参画社会とは、男女が共にゆとりをもって仕事と家事・育児・介護等を両立し、家庭および社会で対等にお互いを活かし合える社会のことです。当社会実現のためには、上記諸問題の優先的、抜本的な是正・解決が不可欠です。

ご退職後は、21世紀の新しい生活経営学の確立と女性の解放を目指して研究に専念し、多年にわたる研究成果を大成したいとのご意向を伺っていました。

先生のご退職後、ご自宅のマンションの建て替えのために移動されるという情報を最後に音信が途絶え、その後一度もお会いすることなく、先般、先生のご訃報に突然接しました。先生と直接お話しできなかったことが悔やまれてなりません。

本学特任教授 岩谷 幸春

(同志社女子大学生生活科学通信 No.57, 2016年6月, より転載)